

蜘蛛の巣

野村胡堂

—

「親分は？ お静さん」

久し振りに来たお品は、挨拶が済むと、こう狭い家の中を見廻すのでした。

一時は本所で鳴らした御用聞——石原の利助の一人娘で、美しさも、伶俐さも申分のない女ですが、父親の利助が軽い中風で倒れてからは、多勢の子分を操縦して、見事十手捕縄を守りつづけ、世間からは『娘御用聞』と有難くない綽名あだなで呼ばれているお品だったのです。

とって二十三のお品は、物腰も思慮も、苦勞を知らないお静よりはぐっと老けて見えますが、長い交際で、二人は友達以上の親しさでした。

「何か御用？」

お静はお茶の支度に余念もない姿です。

「え、少しむずかしい事があつて、親分の智恵を借りたいと思つて来たんだけれど——」

「生憎あいにくね、急の御用で駿府すんぶへ行つたの、月末でなきや戻りませんよ——八五郎さんじゃどう？」

「親分がお留守じゃ仕様がなねえ。——八五郎さんにでもお願いしようかしら」

お品は淋しく笑いました。ガラッ八の八五郎の人の良さと、頼りなさは、知り過ぎるほどよく知っております。

「八五郎さん、ちよいと」

お静が声を掛けると、いきなり大一番の咳せきをして、

「お品さんいらっしやい」

ヌツと長んがい顔を出すのです。

「まア、八五郎さんそこに居なすつたの。あんまり静かにしているから、気が付かないじゃありませんか」

お品は面白そうに笑うのでした。

「あつしでも間に合いますかえ」

「まあ、悪かったわねエ。——八五郎さんが来て下さると本当にありがたい仕合せで——」

ガラツ八はくすくす揶つたく、首筋を搔くのです。でも、そんな事に長くこだわっている八五郎ではありませんでした。お品が事件の説明を始めるともう夢中になつて、一ぱし御用聞の出店くらいは引受ける気だったので。

お品が持込んで来た事件というのは、お品の家とは背中合せの、同じ本所石

原町に長く質屋渡世をし、本所分限者の一人に数えられている吾妻屋あずまや金右衛門が、昨夜誰かに殺されていることを、今朝になって発見した騒ぎでした。

「家の新吉が下っ引を二三人連れて行ったけれど、こね廻すだけで判りやしません。そのうちに三輪の親分の耳にでも入ったら、どうせ黙って見ちや居ないだろうし、——本当に八五郎さんが行って下さると助かりますよ」

お品の調子はしんみりしました。

「うまく言うぜ、お品さん」

そんな事を言いながらも、八五郎はお品といっしよに石原町までか駆け付けていたのです。

「それでは八五郎さん」

吾妻屋の入口から別れて帰ろうとするお品。

「お品さんも現場を見ておく方が宜いぜ」

「でも、私が顔を出しちや悪いでしょう。そうでなくてさえ娘御用聞とか何んとか、嫌な事を言われるんですもの——」

「近所附合いだ。見舞客のような顔をして行く術てもあるぜ」

「そうね」

お品は強しいても争わず、八五郎といっしよに吾妻屋の暖簾のれんをくぐっておりました。

「お、八五郎親分」

迎えてくれたのは利助の子分で、ともかくも十手を預かっている新吉でした。

「たいそうな厄介な事があったんだってね。ちよつと覗かして貰うぜ、新吉兄哥」

八五郎はひどく好い調子です。

吾妻屋金右衛門はその時六十一、生涯を物欲ゆだに委ね切つて、ずいぶん無理な

金を溜めたためにさんざん諸人の怨を買ったらしく、先年女房に死に別れ、放埒な倅を勘当して、娘のお喜多一人を頼りに暮すようになってからは滅切り気が弱くなり、ことに近頃は、一種の脅迫観念に囚われて、『誰か自分を殺しに来る』『俺はきつと近い内に殺されるに違いない』と云いつづけている有様でした。

そんな事から日常生活が恐ろしく神経質になり、半歳ほど前からは、我慢がなり兼ねて、権現堂の力松という男を用心棒に雇い入れ、自分は母屋から廊下つづきの離屋の二階に住んで、娘と下女のお石と、番頭の周助と、用心棒の力松の外には、滅多な人間を寄せ付けないような暮し方をしているのでした。

二

主人金右衛門の死骸は検屍が済んだばかりで、二階の八畳に寝かしたまま、

形ばかりの香華こうげを供えて、娘のお喜多が駆け付けた親類の者や近所の衆に応待し、下女のお石は忙しそうにお茶などを運んでおります。

お喜多は豊麗な感じのする娘で、年の頃十九か二十歳。悲しみも窒息ちっそくさせることの出来ない健康な美しさが、場所柄に似合わず四方に放散しましたが、下女のお石は二十四五の年増。蒼白い顔が少し弱々しく見えますが、粗末みなりな身扮に似合わぬ美しさで、存分に装よそおわせたなら、お喜多に劣おとらぬ容貌きりようになるでしょう。八五郎は咄嗟とっさのあいだに二人の若い女を観察すると、死骸の側に膝いざ行り寄って、いつも親分の平次がするように、ていねいに挿おんでから、顔を蔽おおうてある白い布を取りました。

「――」

思いのほか穏おだやかな死顔です。六十一というにしては、ひどく頽然たいぜんとしていますが、これが半生金儲けに熱中して、石原の鬼と言われた人間の死顔とも思

われません。

首筋のあたりを見ると、間違いもなく細紐ほそひもで締められた跡がありますが、それも至って薄く、首が畸形きけいてきに伸びてない点など、自殺でないことは馴れた八五郎には一と眼でわかります。

「縄も紐もなかったよ。——自分でやったのじゃない」

新吉は注ちゆうを入れました。

「一番先に見付けたのは？」

「私でございます」

お茶道具を片付けていた下女のお石は、少し事務的にハキハキと答えました。

「どんな様子だった」

とガラッ八。

「何時ものように、南側の雨戸を開けて声を掛けましたが、お返事がありません

ん。障子を開けて見ると——」

お石はさすがに息を吞みます。

「床の上とこにいたのか、それとも——」

「床から脱出ぬけだして、その辺に」

長押なげしの下のあたりを指した手を、お石はあわてて引込めました。そこには娘のお喜多がしょんぼり坐っていたのです。

「どんな恰好で」

「お寝巻のまま、俯向うつむきになっていました」

「確かに俯向きだろうな」

「え、さいしよは居眠りして居らっしゃるのかと思った位です」

「縄も紐もなかったのだな」

「え」

「東側の窓は？」

「半分開いたままで、朝陽が一パイに射していました」

お石の知っているのは、それだけのことです。

いちおう間取りの具合を見ましたが、二階は八畳一間だけ。階下は母屋おもやと廊下で繋がつながって、六畳と四畳半の二た間。四畳半は物置同様で、六畳には用心棒の力松が夜昼の別なく頑張がんばっているのです。

「曲者はどこから入ったんだ」

ガラッ八が思わずこう言ったのも無理のないことでした。

「それだよ、八五郎親分」

新吉は八五郎の顔に広がる困惑こんわくを享樂するように、階下から二階を案内します。二階の八畳は西と北が塞ふさがって、南は縁側、梯子はしごでも掛けて内から雨戸を開けて貰わなければ此処からは入れそうもありません。

「雨戸は？」

「そこは念入りに閉めてあつたそうだ。用心棒の力松と下女のお石と番頭の周助の口が揃うからこいつは疑いようはねえ。尤も開けつ放してあつたにしても、梯子でもなきやその危ない庇ひさしに飛付いて二階へ辿り着けつこはねエ」

新吉は狭くて高い庇や、梯子の跡などはない中庭の湿しめった土などを指すのでした。二間ほどの空間を隔へだてて、向うは恐ろしくやわな忍び返し、恋猫こいねこが踏んでも一とたまりもなく落ちそうです。

「此方は開いていたんだね」

東の方は腰高窓、そこを開けると、これはずいぶん塀しほ伝いに登れないことはありません。

「主人の金右衛門が疝かんしやう性で、どこか開いていなきや夜寝付けなかつたというぜ」
新吉の言葉には妙に思わせ振りなところがあります。

「それじゃ、曲者はここから入ったと言っているようなものじゃないか」

八五郎の高くない鼻は少し蠢うごめきます。

「ところが、窓いっぱいには張った女郎蜘蛛じよろうぐもの巣があるだろう」

「――」

「今朝来て見た時からそいつがあつたんだ。どんな器用な曲者だって、蜘蛛の巣を潜くぐっちゃ入れないよ」

ガラッ八は一言もありません。陽を受けてキラキラと光る美しい蜘蛛の巣は、こうなると金網よりも嚴重に見えるのです。

蜘蛛の巣



©2017 萩 柚月

残るのは梯子段が一つ、その下には用心棒の力松が、一と晩頑張がんばっていたことに間違いはなく、力松が下手人でない限り、ここから曲者が忍び込むことなどは思いも寄りません。

「すると？」

「曲くせもの者は家の者だ——。それも主人の寝ている二階へ自由に出入りの出来るものは、番頭の周助か、下女のお石か、娘のお喜多か、用心棒の力松の外にはないことになる」

新吉は自分の智恵を小出しに見せ付けて、ひそやかなる優越感にひたっている様子です。

「一番後で主人に逢ったのは？」

「力松だよ。——尤も日頃丈夫でない主人は二三日前から寝たり起きたりしていたそうだ。現に昨日も気分が悪いからと、昼過ぎから床を取らせて、晩飯も

抜きにしたというから、誰も日暮前から二階へは行かなかつたらしい」
そう言われるといよいよ怪しくなるのは用心棒の力松です。

三

「た、大変ッ」

「親分、ちよいと来て下さい」

階下から、急に、遽はげしい声。

「何んだ何んだ」

八五郎と新吉が梯子段をころがるように降りて行くと、六畳では用心棒の力松を中心に、番頭の周助以下五六人の者が、何やら滅茶滅茶めっちゃめっちゃに揉み合っているのです。

「力松が腹を切るって言うんです」

「止めて下さい。親分」

見ると大肌脱になった力松の手から、五六人の者がヒ首あいくちをもぎ取ろうと必死の騒ぎです。

草角くさずもう力の大関で、柔術やわら、剣術一と通りの心得はあるという触れ込みで雇われやとた力松が、刃物を持って居るのですから、これは容易よういならぬことでした。

「止せ。——止さないか、力松」

新吉が声を掛けると、力松はさすがにがつくり首をうな垂れます。ヒ首あいくちはいつの間にかやら奪い去られて、真夏ながら逞たくましい大肌脱が寒そう。

「相済みません。——でも親分方、旦那が殺されたのは、何んと言ってもあつしの油断ですぜ。——高い給金を貰って、旦那の命を預っていたながら、こんなことになっちゃ申訳がねえ。せめて腹でも切らなきや」

力松はそう言って口惜しがります。一国らしい中年者で、田園の匂いが全身に溢れるだけに、この男に嘘があるうとは思われません。

「お前は本当に寝ているうちに曲者が二階へ登ったと思うのか」

八五郎は要領の良い口を出しました。

「そんな筈はないから、不思議なんで。あつしはね親分、ほかに取柄はないが、酒を飲まないのと眼敏いのが自慢なんで——旦那がそれを見込んで年に十二両という高い給金を出して下さったんだ。梯子段の下に寝て居るあつしの身体を跨いで、二階へ登ってあんな大それた業をするのは、石川五右衛門だって出来ることじゃありませんよ。それに廊下の雨戸は上下の棧をおろした上、一々門が入っているんですよ」

いま腹を切ろうとした力松は、勢いよく弁じ立てるのです。なるほどそう言えば、力松に眠り薬でも吞ませない限り、この関所は通れそうもなく、よしん

ば力松を買収したところで、此処からさまで遠くない店の衆の寢息を窺つて、曲者を引入れるのも容易な業ではありません。

「それほど申訳の筋が立つなら、腹を切るにも及ぶまい——ところでお前がここに雇われた筋道はどうなんだ」

新吉は一步踏込みます。

「あつしの叔母が、大旦那の里親だったんで、毎年の出代り時には、今でも叔母の子——あつしの従弟が吾妻屋の奉公人を引受けて、村から出します。番頭さんは江戸者だが、店中の者は皆んな同じ村の生れですよ」

「そうか」

そう聴けば、力があって、少しは武術の心得のある百姓の倅力松が、並の雇人の三倍の給料で、用心棒に雇われても何んの不思議もありません。

娘のお喜多は、ただおろおろするだけ、昨日の昼から父親に逢わないという

以外には、何んの役に立つことも言つてくれません。

番頭の周助は五十年配の強したたか者で、商売には抜け目がないという評判ですが、主人の財産を殖やすと同じ率りつで、自分の貯蓄ちよちくも殖やして行くほかには、さして悪巧わるたくみがあるうとも思われません。こんな男に取つては、主人の暖簾のれんと威光が何よりの頼りで、まさか金の卵を産む鶯鳥がちょうを絞め殺すほどの無分別者とは思われなかつたのです。

「昨夜は何んか變つたことがなかつたのか」

ガラツ八の一応の問いに対して、

「へエ、何んの変つたこともございません。旦那様はお加減が悪いということ、昼過ぎから離屋へ参るのを遠慮しておりました。店は五つ半頃に閉めました、それから帳合をして私は亥刻半よつごろ家へ帰りました。——私の家はツイ背中合せの、石原の親分さんのお隣でございます」

念入り過ぎる答えですが、この言葉からは少しの怪しい節も見出されません。

「主人を怨うらんでいる者があつたそうだが、誰と誰だ」

「さア、それは一々申すわけにも参りませんが——こんな商売をしておりますと、ツイ筋違いの怨みを買うこともございます」

「商売の外にも怨みを買つたそうじゃないか」

「へエ——」

「若旦那はどうしたんだ」

「若旦那の金五郎様は、親御様と仲違いなすつて、木更津の御親類にいらつしやいます」

「仲違い？」

「何んと申しても、お若いことですから」

番頭の周助も吾妻屋の家庭の事については容易に口を開きませんが、これは

隣に住んでいる新吉から後で詳しく聴きました。

伴の金五郎の家出の原因というのは、少し遊び過ぎただけの事で、大した問題ではありませんが、それより吾妻屋に取って鬱陶しい問題は、ツイ地続きの隣に住んでいる、田島屋との紛紜でした。田島屋というのは、二階の東窓から眼の下に見える小さい住居で、若い主人の文次郎はささやかな背負い呉服を渡世にしておりますが、昔は吾妻屋と並んだ町内の分限で、死んだ先代の頃、吾妻屋と組んで仕入れた上方の織物で大きな損をし、吾妻屋が巧みに逃げたために、一人で引受けて身代を潰したのだと言われております。

その上文次郎と吾妻屋の娘お喜多が許嫁の中だったのを、田島屋がいけなくなる、吾妻屋金右衛門方から反古にし、近頃は文次郎を寄せ付けなければいか、往来で逢っても口もきかないので、文次郎はひどく吾妻屋を怨み、『折があったら、あの親仁を叩き殺す』とまで放言していたというのです。

二十八になつて、背負い呉服屋に身を落した上、お喜多との仲まで割かれた文次郎は、血の氣の多い男で、随分それ位のことはやり兼ねないように、町内の人達からも思われているのでした。

四

翌る日、石原町へ行ったガラツ八は、思いも寄らぬ事件の展開を聴かされました。

「八五郎親分、困ったことになつたぜ」

新吉は言うのでした。

「何がどうしたんだ」

「三輪の万七親分が乗り出して、用心棒りきまつの力松を縛って行つたよ」

「へエ——、証拠が拳がったのかい」

「証拠のないのが証拠だというんだ。二階の南側の縁側からは入れず、東窓にはでっかい蜘蛛くもの巣があるから、曲者は梯子はしごを登って行つたに違いない。梯子の下には力松が夜っぴてとぐろを巻いてしているとすると、下手人は力松の外にな
いというんだ」

新吉もこの理論には争いようがなかったのです。

「それだけのことか」

とガラッ八。

「だから変じゃないか」

「力松は何が望みで主人を殺したんだ。年に十二両という大金を下さる主人だ
ぜ」

「俺もそう言ったが、万七親分は、力松の野郎は纏まとまった金でも欲しかったん

だろうというんだ。ところが纏まった金は離屋の二階などにおく筈はない。金右衛門は身近に刃物とか金をおくことが大嫌いだったんだ。万一悪者が忍び込んで、それを使ったり、使われたりしちゃ困るというんだそうだよ。金は皆んな土蔵の中の恐ろしく巖乗な金箱に入れて、一々念入りに錠じょうをおろしてある」「それでも力松が下手人だというのか」

「三輪の親分には、別に考えがあるんだろう。それにしても口惜くやしいじゃないか、こんなとき銭形の親分が居てくれたら」

新吉はつくづくそう言うのです。ガラッ八の八五郎では、何んとしても力になりません。

「気にするなつてことよ、此方で本当の下手人を挙げりゃ宜いんだろう」

「それだよ。——俺は隣の——田島屋の文次郎が怪しくて仕様がないうんだが」「そいつを当って見ようじゃないか」

「吾妻屋あずまやのために大きい身上をフイにして、親父はそれを苦にして死んでいるんだ。その上お喜多との間を割かれて——あの気性じゃ、黙っているのが不思議でたまらない」

「——」

「その上、あの日の昼頃、文次郎は裏の空地でお喜多と逢引している。——あの晩、忍び込んで一と思いにやらないとは限るまい、空地の上はすぐあの東窓だ」

「蜘蛛くもの巣はどうなるんだ」

「その蜘蛛の巣が、新しくてやけに丈夫だ」

新吉はまた、蜘蛛の巣に頭を突っ込んでしまったのです。

「ともかく、文次郎に逢って見ようじゃないか」

ガラツ八は新吉を誘さそって、文次郎の貧しい家を訪ねました。

背負呉服の細い商売で、辛くも母一人養っている文次郎は、二人の御用聞の顔を見ると、あわてて外へ飛出して、

「親分さん方、後生だからお話は外で願います。年を老とったお袋に苦勞をかけたくはありません」

と手を合せぬばかりにするのです。

二十七八の苦味走った好い男、血の気の多い氣象者らしいところはあります。が、それでも年寄の母の氣持を考えて、御用聞を外へ誘い出すと言った心やりはあります。

「あの日お前はお喜多さんと逢っていた相そうじゃないか」

「へエ——」

新吉の問いは露骨ろこつです。

「まだお前たちは付き合っていたのか」

「へエ——、面目次第もございません。——親御（金右衛門）のお許しゆるがあれば、いつでも一緒になる気でおりました」

「お前は吾妻屋を怨うらんでいたろうな」

「へエ——」

お喜多の父親に対する怨みとも憤いきどおりとも、親しさとも憎さともつかぬ不思議な心持に悩んでいる文次郎は何んと言って宜いか迷った様子です。

「あの晩お前はどこへ行っていたんだ。夕方から留守だった相じゃないか」

「少しばかりの掛かけを集めて、あんまり汗になったから途中で一と風呂入って戻りました」

「掛は、何処と何処で集めたんだ。——風呂は何処のだ」

「さア」

文次郎は困惑した様子です。

「数の多いことですし、度々のことで、よくは覚えてはいません」
「思い出しておくが宜い。その証明が立たなきゃ、お前にも人殺しの疑いが懸
るよ」

「――」
文次郎の顔はサツと血の気を失いましたが、それつきり口を緘つぶんでしまいま
した。

蜘蛛の巣さえなければ、この男を助けておくのでは無かったと言った不思議
な焦躁しょうそうが、新吉の胸をさいなみ始めた様子です。

五

鬱陶うつとうしい日がつづきました。親分の銭形平次はまだ帰らず、お静を相手の留

守番には八五郎の叔母が行ってくれましたが、石原町の吾妻屋殺しの方は一向目鼻もつかなくったのです。三日目の昼頃。

「八五郎さんは」

飛込んで来たのは、『娘御用聞』のお品と、田島屋文次郎の母親でした。

「お品さん、何んか変わったことでも——」

八五郎は頼まれ事の埒らちのあかないのに気を腐くさらせながらも、大して極りを悪がる様子もなく顔を出しました。

「新吉が文次郎さんを縛くわってしまいましたよ。おつ母さんに泣き込まれて、私も弱よわってしまいました。新吉へ彼かれ是これ言うわけにも行かず、そうかと言って田島屋のお母さんとは、お隣附合いで、子供の時分からお世話になっているし」

お品はよほど困った様子です。その後から、

「八五郎親分、伴を助けて下さい。伴は気の早い男だけれど、お喜多さんのお

父さんを殺すようなそんな悪い人間じゃありません。新吉さんは——、あの晩
伴がどこに居たか、はつきりしないから怪しいって言うそうだけれど、私はよ
く知っております。伴はお喜多さんに呼出されて、裏の空地で話していたんで
す」

涙ながらに言う老母の言葉の、妙に辻褃の合った真実性が、八五郎の胸に徹こた
えます。

「よし、行って見るとしよう、何んかの間違いだろう」

飛出した八五郎は、一気に石原町へ——、利助の家には、幸い新吉もおりま
した。

「新吉兄哥、大変なことをやったんだってね」

八五郎の調子は頭ごなしです。

「何が大変」

新吉は少し屹きつとなりました。

「文次郎を挙げた相じゃないか。——あの男は下手人じゃあるまい、現に蜘蛛くもの巣——」

「俺もあの蜘蛛の巣に頭を突っ込んで、三日というものを無駄に過したんだ。ところが、その間に三輪の万七親分は、力松を責せめて口書を取ったという話もある。うっかりしていると、どんな事になるかもわからない」

石原の利助の病軀びょうくを助けて十手捕縄を預っている若い新吉にしては、それ位のあるせりのあるのは無理のないことでした。

「それでも蜘蛛の巣が——」

「蜘蛛の巣は——八五郎親分も知つての通り、新しく綺麗だった。前の晩張つたものに違いない——あの辺は陽当りが良いから、どうせ陽のあたるうちに蜘蛛は働く気遣いはない。八五郎親分にこんな事を言うのは変だが蜘蛛が巣を張

るのは大抵夕方薄暗い頃だ。あの巢だつて昼のうちは無かつたに違いない——
 ということに気が付いたんだ」

「——」

「文次郎は薄暗くなるのを狙つて、蜘蛛が巢を張る前にあの東窓から入つて、
 吾妻屋を殺して脱出した。それで何もかも解るじゃないか。ね、八五郎親分」

新吉の顔には蔽い切れない得意の色が漲ります。ガラツ八の八五郎は、指を
 啜えて引下がるほかはありません。蜘蛛の習性に通じなかつたのが何んとして
 も八五郎の手ぬかりです。が併しこのまま帰つて、まだ吉左右を待っている筈
 のお品と文次郎の母親に顔を合せたとき、一体どんな事になるでしょう。

「こいつは弱つたなア」

見掛けに寄らぬ弱気の八五郎は、神田に帰るに帰られず、そのまま、ろくな
 お小遣もない癖に、親分の平次を迎えに、品川の方へ辿つておりました。駿府

へ行つた平次は、今日か明日は帰らなければならなかつたのです。

×

×

川崎で平次に逢つた八五郎は、そのまま有無うむを言わせず、石原町へ引つ張つて行きました。

「待ちなよ、何んという事だ。長い旅から帰つたばかりじゃないか。女房も待つて居るだろうし、こんな顔でも見せて安心さしてよ、それから出直したところで遅くはあるまい」

そんな事を言う平次も、とうとうガラツ八の熱心に負けてしまつた事は言うまでもありません。

吾妻屋たひしよぞくへ旅装束のままで行つた平次は、内外の様子を念入りに見た上、一人を呼び出して、離屋の二階で調べました。中でも下女お石とお喜多が念入りで、これはざつと小半刻ずつ、一通りそれが済むと、奉公人から娘お喜多の

手廻りの品を見せて貰い、お喜多の持物の中から、中程で引千切った紅鹿べにかの子縮緬ちりめんの扱帯しんぎを一本取出し、それを預つてさつさと神田へ引揚げたのです。

自分の家へ帰つて、一と風呂浴びて来て、久しぶりで一本、女房しやくの酌しやくで始めたところへ、我慢のならぬガラツ八が顔を出しました。

「親分、石原町の吾妻屋殺しはどうなつたんです」

「心配するな、もう解つたよ」

「下手人は」

「これだよ」

平次が袂たもととから取出したのは、眼の覚めるような紅鹿の子の扱帯。

「その扱帯が下手人？」

八五郎の驚きようはありません。

「そうだよ。——お前には解るまい、ざつと話そう。力松が下手人なら、偽の

証拠をうんと拵えておくよ。庭へ梯子はしごを持出すとか、二階の雨戸を外して置くとか。——そんな事でもしなきゃ、疑いは真向から自分へ来るじゃないか」

「——」

「文次郎はあの晩東窓の下の空地でお喜多と逢引していたんだ。どこに居たか言われなかった筈さ。あの男は好きな女の父親を殺すほどの悪人じゃない。——それに蜘蛛くもの巢は夕方明るいうち張り始めるはじ。八方から見通しの二階の東窓へ、蜘蛛が巢を張り始める前に人間が忍び込むなどは思いも寄らない。新吉兄哥は考え過ぎたのだよ」

「すると」

「下手人はこの扱帯しじきさ。——吾妻屋の金右衛門はさんざん人を泣かせた酬むくいで、年を老って気が弱くなったんだ。『誰かに殺されそうだ』と言いつづけて居たのは、正気の沙汰ではないよ。——その上倅の勘当や女房の病死ですっかりこの

世がいやになり娘のお喜多が何んかのはずみで忘れて行った扱帯を見ると、この燃えるような美しい鹿の子絞りに引かれて、フラフラと死ぬ気になった。――金右衛門はときどき自分で死ぬ気になることがあったんだ。金右衛門はそれが怖くて、刃物や紐類を身近に置かなかつたんだ

「すると」

「長押なげしに扱帯をかけて首を吊つたのさ――よく見ると長押は扱帯で擦すれた跡があつたよ。――が、扱帯が弱いのですぐ切れた。金右衛門は下へドタリと落ちるはずみに、弱っていた心の臓を破つたんだ（心臓破裂はれつ）、それっきりさ。死骸の喉のどの跡が薄かつたのも首の伸びていないのもその為だ」

「切れた扱帯しじきはどうしたんです、親分」

「翌る朝あの部屋へ一番先に入った下女のお石が隠したのさ。見覚えのあるお嬢さんのお喜多の扱帯で主人が絞め殺されていると思ひ込んだんだ。何が何ん

でも、こいつは隠さなきやなるまいと思つた」

「力松や文次郎が縛られて黙つていたのは？」

「二人とも方に一つ処刑おしおきになるような事はあるまいと多寡たかをくくつたのさ。あのお石という女は妙に行届いた女だよ。尤もお喜多と逢引する文次郎が憎かつたのかも知れない——若い女の心持は、俺たちには謎だよ」

「するとどうしたものでしょう」

「放つておくが宜い。お石じゃないが力松と文次郎はもう帰るだろう。帰らなきや明日にでも八丁堀へ行つてやろう。三輪の親分や新吉しんきち兄哥あにがに強しいて恥をかかせたくないが——それより差当つてお静を口説いてもう一本つけさせる工夫をしよう。お前も付き合つてくれ、なア八」

平次は杯をあげて、カラカラと笑うのでした。下手人を出さなくて如何にも良い心持そうです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十八年六月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行
銭形倶楽部

蜘蛛の巣



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>